《巻頭特集》

法学部における硬式野球部員の教育

――「文武一体」の追求――

鈴木隆史

目次

一 立正大学における硬式野球部事情（１９９６年～２０１２年当時）
二 法学部と野球部による「文武一体」改革
三 短期海外研修（硬式野球部員用）の実施について
　１．２０１２年度立正大学１４０周年記念事業（国際試合）兼短期海外研修（硬式野球部員用）
　２．内容
四 振り返って

一　立正大学における硬式野球部事情（１９９６年～２０１２年当時）

今回、立正大学法学部における硬式野球部員の教育について寄稿する機会を得たが、私が硬式野球部（以下、「野

球部」または単に「部」という）に係ったのは、法学部に移籍後、１９９６年に入試委員に任命されて硬式野球部員（以下、「部員」ともいう）受け入れの担当者となってからであり（以下、その頃のことを「当時」という）、その後、法学部長[1]、野球部長[2]として係わった２０１２年までの期間である。以下、その間に私が個人的に係わった内容について述べたい。

野球部創設時、部員は各学部に分属していたが、熊谷キャンパスへの寮の移転に伴い、熊谷に所在する法学部が担当学部としてすべての部員を受け入れることとなった[3]。野球部は大学の名前で活動しているものの、実際には法学部が野球部員全員の入学から卒業までの面倒を見ていたのである。また、寮での生活、練習、授業という、部員の活動すべてが熊谷キャンパス内で完結しており、部員が東京の大崎キャンパス（現在は品川キャンパスと改称）に行くことは稀だった。従って、熊谷キャンパスにおいて、法学部が、教育のみならず、部員の生活すべてに責任を負う立場に置かれていた。更に、野球部長が、部活動についての全学の担当責任者であったが、部創設以来の慣行なのか、自動継続されることなく、毎年学部教員の中から学部の推薦により学長から任命されるという形をとっていたため、交代も頻繁であった。こうしたことから、野球部長を核としつつも、法学部が長期的な野球部の強化を含めた編成・運営の責任をも事実上担っていた。

担当学部制から導かれるこうした事情に加え、野球部員の教育に影響を与えたのは、野球部が所属する東都大学野球連盟（以下、「東都連盟」という）が原則として平日に公式戦を実施するという事情であった。これは、週末に公式戦を行う他の大学野球連盟と異なる特徴であり、部活動と授業との両立を非常に難しくしていた。仮に公式戦に合わせて授業日程を調整したとしても、天候等により日程がずれ込むことも多く、また部の入れ替え戦の結果（東都連盟は21校からなる四部制をとっており、上の部の最下位校と下の部の優勝校とで入替戦を行う）、一部に所属する

か、二部に所属するかによって、公式戦の曜日・球場が年度途中で変更されるので、授業日を予め調整することにも限界があった。また、公式戦に合わせて、当時は練習も平日の日中に全学年合同で行われており、公式戦期間中の授業への出席は想定されていなかった。[4] こうした野球優先の日程の下で部活動と教育とを両立させる為には、抜本的な改革が必要であり、法学部による野球部員の教育環境およびカリキュラムの見直しと、それと連動した野球部活動の見直しが求められていたのである。

二　法学部と野球部による「文武一体」改革

野球部員に対する大学・学部の教育責任や改善の必要性については、従前から認識されていたのであろうが、当時、部員は公式戦期間中に授業へ出席せず、それに代わる教育指導や支援も十分なされていないなど、具体的な改善成果が十分とは言い難かった。その実効性ある改善が不可避なものとして要請されたきっかけは、大学基準協会による大学認証評価システムの導入であった。本学が全国的な基準に照らして認証評価を受ける際に、野球部員についても学生としての教育環境が適切に確保されていることが当然に要求され、基準を満たす必要があった。折しも、本学は認証評価を一度保留とされていたため、再び躓くことは許されなかった。また、一時期大学の広告塔として持てはやされていたスポーツ系部活動における不祥事が相次いだことから、結果を重視した部活動偏重から、社会的に有為な人材を育成する大学教育の一環としての本来の部活動のあり方への転換が、社会から強く求められるようになっていた。

こうした外部的要請に応えつつ、全学から委嘱された責任を果たす為に、法学部は野球部と緊密に協力を取りな

がら、「人を育てるための学生本位の大学スポーツ教育」を目指して、抜本的な教育環境整備に取り組んだのである。以下は、その概要である。(5)

なお、これらの改革は、単に野球部員の教育改善のみにとどまらず、少子化が進行する中、時代に即応した学生本位の学部づくり、教育環境の整備が求められているという時代的要請に応えて、立正大学法学部の生き残りを掛けて行われた、総合的な学部改革の一環であった（ここで紹介するのは、その内の野球部に係わる一コマでしかない）。その為、改善計画の精査と関連する他分野との統合的調整に膨大な時間を要し、幾度も試行錯誤しながら総合的な検討を積み重ねたのである。こうして出来上がった改善内容とその実現には、当時、法学部長である私を補佐してくれていた永田高英主任による学生本位の学部づくりに向けての総合的プランニング、ならびに位田央主任によるコース改編（従来の英米法文化コースの廃止と、野球部員にも適応しやすい現代社会コースの新設）とカリキュラムの充実に向けてのご尽力に多くを負っている。学生本位の学部づくり、ならびに野球部改革のために寝る間も惜しんで努力してくれた、彼らを含む当時の教職員諸氏に対し、この場を借りて改めて感謝と敬意を表したい。

■「硬式野球部の基本理念・基本目標」の策定

立正大学硬式野球部は「有為な社会人を育てるための教育組織の一員」であることを真摯に受け止め、単に競技面だけでなく教育・生活面でも日本一を目指すべく、２０１１年に野球部存立の原点を確立するために「硬式野球部の基本理念・基本目標」を策定した。以後、この基本理念・基本目標の下、教学と現場が一体（**文武一体**）となって「人を育てる」大学スポーツの理想の実現を目指して日々努力してきている。

1．基本理念―何のために立正大学硬式野球部は存在するか？

・（学内外で）「**皆から応援され、誇りに思われる野球部**」
・（心ある高校球児にとって）「**日本でいちばん入りたい野球部**」
・（心ある高校指導者・保護者にとって）「**日本でいちばん入れたい野球部**」
・（社会にとって）「**日本でいちばん受け入れたい野球部**」

これらの野球部たるべきことを追求することで、日本で最も厳しい東都リーグにあって、他の強豪校の二番煎じでは決してない特色や哲学をもった、大学野球のひとつの「型」をなすべく存在する。

2．基本目標―理念の追求のために立正大学硬式野球部は何を目指すか？

一．〝**文武一体**〟（＊）により、学生野球の本分（「学生本位・教育第一」「野球部員である前に法学部生・立正大生たれ」「野球部版・モラリスト×エキスパート」）の実現を本気で目指す。
一．「**人**（選手・人間）**を育てる部**」「**すべての部員**（レギュラー候補だけではない）**が活かされる部**」を目指す。各種環境づくり（教育・生活サポート、人事政策、指導体制・方法、施設・設備等）もそのための一環として位置づける。
一．競技面でも、相手チームに敬意を払い、国内最高峰の東都リーグで野球をやれる喜びや感謝の念を忘れず、全員一丸となった野球を目指す。

＊**文武一体**……これまでとかく分離しがちであった教学サイドと野球の現場が、同じ理念・目標に向かって一体となってその実現に取り組んでいく方法のこと。

■野球部用のカリキュラムとコースの新設

①現代社会コースの新設＝導入的な科目を用意して親しみやすいコースを新設

②部員にも親しみやすい「スポーツと法」や「スポーツと科学」などの授業を用意
③平日は授業優先で、授業の合間に学年別に練習実施。教職科目等を取りやすくするために、各部員が自由に科目登録することを可能に
④通常授業以外の特別講義・集中講義を用意
⑤3年生の短期海外研修（後述）を実施

■授業支援
①公式戦期間中の授業におけるノートテイカーの配置
②寮内に教科書・受験用参考書その他の図書を整備
③退部した部員が退学せずに学部に残って勉強し続ける為の支援

三　短期海外研修（硬式野球部員用）の実施について

1．2012年度立正大学140周年記念事業（国際試合）兼短期海外研修（硬式野球部員用）

ここでは、2012年度に実施した、法学部と野球部との協力によって実現した授業である短期海外研修（野球部3年生用）と、立正大学140周年記念事業（東都連盟の承認を得て実施された国際試合）について述べたい。(6)

■趣旨

「学生本位の学部づくり」という基本方針に即した野球部員の教育改善は、「野球部員である前に法学部生・立正大生たれ」ということを求めるものであるが、それを野球部員に求める以上は、教学側も部員に学生としての教育環境を提供する責任を負うことになる。しかし、現実には、野球部の公式戦やその為の準備期間が長いことから、一般学生に提供されている教育機会を部員が十分利用できないことがある。その一つが、短期海外研修であった。一般学生が語学研修等を目的として短期留学をする場合、学部の選考を経て資金援助と単位認定をする海外研修科目が設けられていたが、それを部員が利用することは困難であった。一方で部員である前に学生たれと要請しながら、実際には学生としての海外研修の機会を部活動が妨げているという矛盾が存在し、大学基準協会から要請されている、すべての学生に対する教育の実質化、教育機会の平等性が十分確保できていないということでもあった。

そこで、ともすれば「野球界の常識」の中に埋没しがちな部員の社会化を促進し、学生としてはもとより、野球人としての基盤にもなりうる骨太の人間性・人格づくりの為に、さらには野球部員に対する教育効果のある中身づくりの為にも、積極的に海外研修機会を提供すべきではないかと考えるに至った。それは、言い換えれば、国際経験という触媒による化学反応によって、立正精神である〝モラリスト×エキスパート〟の育成の野球部版を実現しようという狙いでもあった。

■準備

研修実現のために克服すべき課題は多かったが、中でも一番大きな課題は資金確保であった。しかし、学部が海外研修補助の原資としてきた教育充実費がこれまで部員に還元される機会がなかったことから、部員の4年間の納

付分をこの研修費に充てることで、学部からの補助資金を確保した。また大学からは、今回の研修・国際試合を立正大学創立１４０周年記念事業として認定・補助していただくことで、４年生の参加によって増加した費用を賄うことができた。さらに野球部からの補助を加えて、部員自身の費用負担をできる限り抑える努力をした。その結果、国内キャンプ以下の費用負担となったため、父母からも非常に好評であった。

もう一つの課題は、練習機会の確保であった。この点は、野球部と協議し、毎日練習を行うことで了解を得た。外野の一部からは「物見遊山に行く暇があるなら練習しろ」というような批判があったようであるが、かつての野球漬けの時代と異なり、この頃には野球部改革や教育環境の整備もなされ、部員は野球以外の学習面や生活面でも、学生として求められるレベルで日常的に努力を重ねていたので、そうした実態を知らない見当外れな批判であった。また、すべての部員が野球の道に進むわけではないことから、部員の見聞を広め、進路選択の可能性を広げる上でも、将来に備えた成長の機会を提供する意味があった。

むしろ意外だったのは、多くの部員が研修を歓迎する中、研修せずに日本で野球練習に打ち込みたいと願う部員が少数いたことであった。彼らは、野球を進路として希望する者であり、その一人は長谷川秀輝主将（4年、青森山田高校）であった。彼としては、自分の代で一部復帰させたいとの責任感から、当初は研修参加に懐疑的であったわけであるが、研修後には「非常に良い体験をさせてもらった。野球意識の面でも大きく成長できた」と感謝された。部員の中には、高校で燃焼しつくし、大学野球の厚い壁に跳ね返されて、野球嫌いになった者も少なからずいたが、アメリカ野球に接して改めて前向きに野球に取り組む姿勢を取り戻した者も多かった。その意味で、野球部の活動においても有益な効果があったように思われる。

2．内容

■参加者等（役職・地位は当時）

短期海外研修は3年生用科目であることから、当初は3年生だけを対象としていたが、4年生からも強い希望があった為、希望者が任意参加できることとした。その結果、長谷川主将以下42名の野球部員が参加した。団長は小島敏男客員教授兼評議員（元文部科学副大臣／元衆議院議員）、日本における事前指導と全行程の引率を小山啓太法学部非常勤講師（コーチ兼トレーナー／NATA-ATC＝米国公認医療従事者）が担当し、これに現地での実施責任者として鈴木（在米研修中）とその補佐として李斗領法学部准教授（在NZ研修中）がロサンゼルスで合流した。更に記念試合の監督の為に、伊藤由紀夫監督が途中参加した。日本における事前準備、送り出しから帰国までの一連の対応については、日本における実施責任者である永田高英野球部長（全学・野球部関係）と舟橋哲法学部長（法学部関係）から手厚いサポートを受けた。また、今回のプロジェクト実現に当たっては、大学当局からの手厚いご支援を頂戴した。この場を借りて御礼申し上げたい。

現地受け入れに当たっては、トレイ・ヒルマン・ドジャースコーチ（元日ハム監督）、ジョシュア・モリー氏（カリフォルニア大学）、ジェイソン・ボライリー氏（スタンフォード大学）、USC関係者、現地日系人の方々に大変お世話になった。

こうした多くの方々の支えがあって初めて可能になったプロジェクトであったが、その原点は「学生の為に」という素朴な気持ちであり、それが日米で共有され、海を越えて一つに繋がったからこそ実現した成果であった。

■日程

２０１２年８月３日に出国し、８月10日に帰国する７泊８日の行程であった。

［出発前］　今回の研修を授業として実のあるものとするために、ＴＯＥＦＬ模擬試験や現地の社会事情（日系人の歴史等）の事前指導を小山講師が担当した。

［一日目８月３日出国　→　８月２日（以下、現地時間）］　野球部員42名、日本から引率してきた小山コーチがアメリカ・ロサンゼルスに無事到着。現地引率者である李准教授と鈴木が現地で出迎え。

［二日目８月３日］　南カリフォニア大学（University of Southern California＝USC）建築学部の授業参観。図書館、スポーツ施設を見学した。アメリカ西海岸で最も歴史ある私立大学であるＵＳＣは、１９１２年以降毎回オリンピックに金メダリストを輩出する全米唯一の大学であると知って驚く。午後は、グラウンドで汗を流す。

［三日目８月４日］　練習。現地のＴＶ局や新聞社から取材を受ける。

［四日目８月５日］　小島団長と伊藤監督が合流。練習後に、全米日系人博物館を訪問。第二次大戦中の日系アメリカ人の強制キャンプ収容時の生活について日系人の方から説明を受けた。その後、羅府新報社・中村良子記者（本学文学部卒業生）の講演。アメリカ留学から現在までの経験談を聞き、「若い時の感動、経験、夢、失敗を大事にし、野球以外にも趣味を持って社会に通じる人材になってほしい」という先輩からのエールに、部員一同感激した様子。野球を離れた体験は、日米の厳しい時期を乗り越えて、現在野球を通じて平和に交流できることの意味を深く実感させる機会となった。

［五日目８月６日］　練習後に、ＬＡドジャース球場を見学。公式戦前の練習中のグラウンドに入ることを特別に許可して頂き、間近で大リーガーの力強さを体感した部員は、まさに興奮状態であった。その後、元日ハム監督

のトレイ・ヒルマン・コーチの講演を聞き、「強いチームになる為には、チームを家族と思って下さい」との激励を頂く。

夜は、COロッキーズとの試合を観戦。ドジャース球団のご厚意で、球場のスコアボードに立正大学１４０周年を祝うメッセージが掲示された。立正大学の一員として誇らしい瞬間であった。

［六日目８月７日］　午前は、ＵＳＣの在学生案内によるキャンパス・ツアーに参加し、米大学野球の聖地であるデドゥー球場 Raoul Rod DeDeaux Field、オリンピック・トレーニングセンター、図書館その他の大学施設を見学した。午後は、小島団長の始球式により１４０周年記念国際試合を開催。ＵＳＣとスタンフォード大学の混成チームを相手に、19対５で大勝した。相手はオフシーズンであり、本来の調子ではなかったが、対戦相手の監督からは、「立正の隙のないプレーに新鮮な感銘を受けた」との褒め言葉を頂戴した。

試合後の部員は、記念撮影が終わっても興奮が収まらなかった。全米大学一に12回輝いた強豪相手に互角以上に戦えた経験は大きな自信となり、練習モードから試合への瞬時の切り替えも含め、ＵＳＣの選手達がリラックスしながらも真摯に野球に取り組む姿勢から沢山の刺激と学びを得た。

夕方から懇親会。連日新しい体験に意欲的に挑戦した部員達を慰労し、現地日系人その他の関係者と交流した。ＵＳＣアジア担当責任者や日本総領事館の中村領事も参加してくださり、「今回の事業が両大学間および日米両国の交流に大きな貢献を果たした」との有難いお言葉を頂戴した。とりわけ、今回の事業・研修が、単なる野球部のみの交流にとどまらず、教学レベルでの国際交流の一環として実現したことを高く評価していただいた。立正大学法学部が目指す「文武一体」のスポーツ教育の正しさを感じられた瞬間であった。

四　振り返って

若者の成長には、気づきが重要であると言われるが、これまで野球で努力を積み重ねてきた部員にとって、野球以外での新しい体験は、これまでの野球経験では得られない新しい気づきと、自分が毎日当たり前に過ごしてきた日常を支えてくれている人々や環境への感謝を抱かせたように思える。帰国後の部員の顔つきが変わり、多くの下級生からは「明るく逞しくなった」との感想が聞かれた。それだけの人間的成長につながる経験であったという事だろう。

日本で一番厳しいリーグと称される東都連盟に所属する各野球部は、日々弛まぬ努力を続けている。そんな中、通常の野球練習から外れる事には不安もあったであろうが、帰国後は、「本学野球部に所属するからこそ経験できた貴重な体験であり、人間的にも野球面でも大きく成長できた掛け替えのない経験となった」と多くの部員から感謝された。ともすれば、大学においても野球部員としての意識が強くなりがちであるが、こうして学部や大学から学生として大切にサポートされることを通じて、改めて学生としての前向きな意識と立正人であることの誇りを得たのではないか。もしそうであれば、この体験が部員の人生にもたらす恵沢は余りあるものであり、有為な青年を多く輩出することで、立正大学硬式野球部にとっても部の活性化につながる積極的な取り組みとなったことであろう。

実際、野球部はその後一部に昇格し、２０１８年に再び大学日本一に輝き、大学強豪の仲間入りを果たした。その結果も嬉しいことではあるが、何より嬉しいことは、部員の進路が以前に比べて格段に良くなり、多面化してき

ていることである。それは、ひとえに部員各自の努力によるものであるが、このような研修も含めて、大学において学生として成長する機会を十分に活かした結果であり、法学部教育が野球部員の成長に貢献できたことの証明でもあるといえよう。

■研修参加者の感想

①小島敏男団長

「立正大学創立１４０周年記念プロジェクトの一つとして行われた事業で、２０１２年実施当時としては画期的なことだった。私は熊谷校舎の地元代表として客員教授、理事、評議員として大学に携わっていた。大学自体は地味なイメージで、今もそうだが学生は真面目なおとなしいタイプが多く、一万人を超す大世帯としては落ち着いた校風だ。その為、最初鈴木隆史先生からこの話を伺った時「本当ですか⁉」と意外性に驚いてしまうほどだった。計画を発表する前の下準備は大変な作業で、大学を動かすのに相当苦労を重ねてきたことを後で知った。

私自身、今から50年程前になるが、約2か月間単身でアメリカ、ヨーロッパの主要都市を駆け足で回った経験がある。最後はイスラエル、インドを経て帰国についたのだが、当時はＪＴＢも近畿ツーリストも世界中にネットワークがなく、知人が努めていたアメリカンエクスプレスにお願いして実行した。この時の経験はその後の私の人生に大きく影響したことは言うまでもない。

「若い時に旅をさせろ」という諺があるが、このプロジェクトに参加した野球部員たちは異国の地を踏むことでより親近感を覚えたことだろう。日本を離れたことで日本の良さを再認識し、また外国のすばらしさを学ぶことが出来たのではないか。ましてや世界にその名を知られているアメリカの伝統校南カリフォルニア大学で、親善野球

試合が実施される段取りを取ってもらったわけだからだ。私も初めて訪問したが、とてつもなく広いキャンパスと伝統と歴史を積み重ねてきた建物群。まるで一つの街の中にいるような錯覚を起こしてしまうほどだった。日本でいう「大学」という概念は完全に打ち消されてしまった。

その他ロスアンゼルスの日系記念館、本場の野球見学等、単独では味わえない数々の想い出を与えてくれた。その後立正大学野球部は２０１８年日本一に輝くが、このような自由な校風と先生方の学生主体の考え方が将来につながってゆくものだと固く信じている。

あの時ご一緒した学生たちは社会人としてその後どのような生活をしているのか興味が湧いてくる。きっと貴重な経験をしたことを糧に、それぞれの場で活躍してくれていると思うと実施してよかったと思っている。」

②当時参加した４年生（秦　夢有希氏）

「ロサンゼルスには一度行ってみたい気持ちは小さい時からあったので、とても嬉しかったです！

ロスでは色々なことを体験させていただきました。ＵＳＣの大学生と試合、歴史を学んだり、伝統あるドジャースタジアムで試合を観戦させていただいたり、ハリウッドやビバリーヒルズなど有名な所にも行き、アメリカの食事もでき、色々な体験をさせてもらい、本当に良い経験になりました！

卒業してから９年経ちますが今でもとても良い経験、思い出になっています！

また海外に行けるようにと頑張って働いているところもあります！

最後になりますが、大学には色々な経験をさせて頂いて本当に感謝しています！

ありがとうございました！」

（東海大相模高校―２００９年入学―鷺宮製作所・硬式野球部所属）

③当時参加した３年生（原田拓実氏）

「海外研修を通じて、学生時代に海外の文化を経験、体感し、尚且つ共に勝利を目指している仲間と共有できたということは、人生の大きな財産になっています。

立正大学野球部では、自分で考える野球を学びました。社会に出てからも、学生時代に学んだ考える力は、野球でも野球以外でも活きています。そして、ただ野球をやらされているのではなく、指導者とのコミュニケーションの中からより良いものを見つけ取り組めたことが、私自身の引き出しにもなり基盤にもなっています。

学んだことを活かし、在学生や未来の立正生の道標となれるように引き続き精進していきます。本当に立正大学で野球ができて良かったです。」

（天理高校―２０１０年入学―日本生命・硬式野球部主将）

④現在、アメリカ留学中の野球部ＯＢ（深谷柊平氏）

「ロサンゼルスで実施された海外教育研修は、野球を通じて参加者の文化、教育、スポーツなどに対する観点を大きく変化させました。海外教育研修では University of Southern California や Occidental college などアメリカでも一流の大学の教育システム、施設、スポーツを肌で感じました。海外教育研修は私の人生観を大きく変化させ、特に学問の大切さと文武両道の重要さを学びました。海外でのこの経験は自分のチャンスと可能性を見つけることができ、自分が本当にやりたいこと、人生をかけてできることは何かを考える機会を与えてくれました。今自分が

アメリカで活動できているのは、野球部の仲間と経験した海外教育研修があったからです。」

（学法石川高校―２０１４年入学―エンポリア州立大学アスレチックトレーニング専攻）

註

（１）　２００５年～２０１１年。

（２）　２０１０年～２０１２年。

（３）　硬式野球部の歴史については、鈴木隆史「硬式野球部」『立正大学創立１４０周年記念誌』（２０１２年）１２９―１３１頁参照。

（４）　強化クラブでも、野球部のグラウンドだけに夜間照明がないのは、昼間の授業出席を可能とする為の夜間練習を想定していなかった当時の活動の名残である。その後の改革努力の結果、現在では原則として平日は授業参加優先とし、授業の空き時間に学年毎の練習をし、全体練習は週末に実施するように改善されている。

（５）　改革の詳細については、鈴木隆史「21世紀の大学スポーツ、大学野球を考える」小山啓太『現代社会のスポーツ総合学Ⅰ』（成文堂、２０１２年）96―１０９頁参照。

（６）　ここでの記述の多くは、同行引率者であった李斗領准教授（当時）の報告書「立正大学１４０周年記念事業（国際試合）兼法学部海外研修（硬式野球部員）２０１２」に基づいている。感謝を表したい。